

2014 3/11

No.1966

毎月第2・第4火曜日発行

政経 かながわ

一般社団法人
— 神奈川政経懇話会 —



千代紙などで作られた色とりどりの吊(つる)し飾りが、北鎌倉地区を彩っている。3年目の今年はJR北鎌倉駅を中心に南北約2^{km}の範囲で、90カ所以上の店頭や店内に飾られている。写真はかまくら陶芸館(鎌倉市山ノ内)。3月30日まで。



contents

視点・点描	3
パンチの守とワグマン	
講演録	4
「夢への挑戦～私の柔道人生」	
全日本柔道男子監督・東海大学講師 井上 康生	
政治	8
統一選は存亡懸けた戦い	
地域から党の信頼取り戻す	
政治	10
「脱原発」で一強政治に風穴	
小泉効果が呼び起こす波紋	
くらし2014	12
“地域包括ケアシステム”って？	
企業最前線	14
震災経験生かし製品づくり	
つり天井など問題点を改善	
広告珍談	16
新聞広告が始まった⑤	
酔っぱらいの告白	
ミャンマーミッション報告	17
ミャンマーミッション報告	
会員の動き	18
ミャンマーミッション報告	19

事務局だより

◇横浜定例講演会

2014年4月14日（月）13時
30分～15時

新横浜プリンスホテル 3階
「セレナーデ」

講師はPHP総研国際戦略研
究センター長、主席研究員の
金子 将史 氏

演題は「パワーシフトと日本
の進むべき道～これからの日
米関係を中心に～」

視点 点描



パンチの守とワグマン

横浜市中区にある県立歴史博物館には、青い目にちよんまげ、かみしも姿の営業部長がいる。名は「パンチの守」^{かみ}。2月の大雪の金曜日には玄関前で雪かきをするなど、活躍しているII写真。

もとは、英国人報道画家ワグマンが描いた風刺漫画の登場人物。刀でなく、鉛筆と羽ペンを腰に差しているところがすてきた。

チャールズ・ワグマン、18

32年英国生まれ。英週刊紙「イ

ラストレイテッド・ロンドン・

ニューズ」特派員として61年、開

国まもない日本の土を踏む。来日

早々、攘夷派浪士が英国公使を襲

撃した「東禅寺事件」に居合わせ、

生々しい現場の様子を世界に伝え

た。翌年、横浜で「ジャパン・パ

ンチ」を創刊。87年の終刊まで、

自らが見聞した時事ニュースや横

浜居留地の出来事を記した。その

表紙絵を飾ったのが、ワグマンの自画像とされる鼻の大きな「パンチの守」だ。日本で漫画絵を「パンチ」と呼ぶのは、「ジャパン・パンチ」にちなむと、恥ずかしながら初めて知った。

ワグマンが活躍した時代、特に幕末時は、写真は発明されていたが報道現場ではまだ十分活用されず、多くの画家が報道カメラマンの役割を担っていた。ワグマン

も来日前に中国でアロー戦争を取材している。アジアの東端の国から送られる数々の事件や慣れぬ風俗についてのレポートを、欧



州の人々は
どんな風に
読んでいた
のだろうか。
戦場カメラ
マンの渡部
陽一さん

や、シリアで取材中に殺害された山本美香さんのような仕事をしていたのか、とちよつと不思議で意外な気もした。

県博によれば「パンチの守」の営業部長起用は、歴史に興味をもつきっかけになればとの思いから。ゆるキャラならぬカルキヤラ（カルチャーII文化的IIキヤラクター）を目指す、とも。

ワグマンは日本女性と結婚し子をもうけ、91年に亡くなった。墓のある横浜外国人墓地で毎年、命日の2月8日に墓前祭（ワグマン祭、別名ボンチ・ハナ祭）^{まつり}が行われるが、今年は大雪のために中止。ハナ祭のハナは、彼の高い鼻と花をかけたもので、花1輪を持参すれば誰でも参列できたからという伝承も心にしみた。

（神奈川県社文化部長

青木 幸恵）

酔っぱらいの告白

前号に紹介した、日本人最初の（3）年12月8日に発刊された、《横

日本語による広告を掲載した《万国新聞紙》は、現在の新聞とは大
ちがいが、なにしろ、活字はまだ無い。
木の板にノミで文字を彫って、
墨を塗り、紙に写し取る。紙は薄
いと和紙。それを2つに折って、こ
よりで綴じる。こよりとは和紙を
細く切つて、よりをかけたヒモ。
できたのは冊子。つまり雑誌のよ
うなもので、およそ新聞とはほど
遠い。

万国新聞紙の前後にでた《海外
新聞》も、《横浜新報もしほ草》（岸
田吟香とヴァン・リードが186
8年4月発刊）も同じような冊子。
どれも発行は月1回。つまり月刊
紙である。

ならば現在のような日刊新聞
は、いつから出たのか。70（明治

3）年12月8日に発刊された、《横

浜毎日新
聞》（今の
毎日新聞と
は無関係）
である。長
年、現物が
なく幻の新
聞であった
が1964
（昭和39）
年、群馬県
で発見され
た。右が1
ページ目、
左が2ペー
ジ目。タテ32センチ、ヨコ28セン

チのタブロイド版（通常の新聞の
半ページ大）。和紙ではなく、洋
紙に両面刷りの2ページである。



海外への窓口である横浜にこ
そ、毎日発行される新聞が必要と
考えたのは神奈川県知事・井関盛
良。原善三郎（原三溪の義父）な
ど、地元財界人が資金援助。ヘボ

当然である。購読者数はまった
く手さぐり、広告収入をあてにす
るしかなかった。だれが営業に
回ったのか、創刊号にチャーンと
広告が載った。2ページ目の左下、

「野毛橋むこふ貳丁目横町菓種
屋となりへ引移申す。馬しや道
駒形橋かと 料理屋まるきん」
横濱馬車道の駒形橋角にある料
理屋まるきんが、野毛橋の向こう
2丁目横町、菓屋のとなりへ引つ
越すと。日本最初の日刊紙に載つ
た、記念すべき広告である。

この辺りをボクはときどき、徘徊する。だけど料理屋にはとても
入れない、居酒屋がよろしいと
酔っぱらいの告白であります。

わが貿易振興のために発行する。
広告は夕刻4時までに申し込めば
翌日掲載すると、社告に入れるほ
ど広告を重視していた。
（美術エッセイスト、茅ヶ崎市在住）
（図）日本最初の日刊紙「横浜毎
日新聞」創刊号・1870（明治
3）年12月8日発行